

少しも長短を付けられないものが多いのみならず、雨蓋も竹を使つたり、或は板を用ひたり、それぞれ適宜になつてゐるが、之も場所にもより、用ひどころにもよることとて、定法が亂れてゐるからと云つて敢て排斥すべきことではないけれど、周囲の模様によつて適當の均衡を保つやうに注意しなければならぬ。

科學上より觀たる家相

凡そ住宅を建築するに當つて、家相といふことを口にしない者は稀である。而もそれが目に一丁字のない無學文盲の徒ならば兎もかく、相當有識の人から之を聞くのは全く意外とするところで、それがために折角苦心の末に成つた設計圖が犠牲になる例は尠くない。けれども家相は之を迷信として全然一笑に附し去るべきものであるかといふに、それには大に據るところがあるやうに思はれる。例へば、人生の禍福をトム人相家の吉凶判断は、縦令、悉く之を信じ得られないとするも、尙若干の眞理を語つて居るやうに、家相も亦有益なる參考となる場合がある。家相と人相とは素より其の法を異にしてゐるが、俱に東洋哲學から出立して、昔は一の權威を以て臨んだものである。故に之を研究して斯道の參考に供する事は極めて興味ある業で、聽て之が住宅を建築する者の道標と

もなると思ふ。即ち、家相は全然之に囚はれるときは迷信になるけれども、之を研究的に観るときは好個の材料たるを失はないのである。

家相の沿革

歴史を按ずるに、支那に於ては、左傳に魯の哀公が住宅を建つるとて方位を云々した事がある。周官には「司徒土圭之法を以て十有二土の名を辨じ以て民宅を相し而して利害を知る」とあれば、此の周代を以て稍々成立した家相術の起源となすべきか。

我が國では、推古天皇の十年、百濟の僧觀勒と云ふ者天文、地理、曆法、遁甲、方術の書を奉り、時の朝臣山脊臣日並立方術を學ぶとある。此の時代に既に一箇の術として朝廷に重んぜられた事は明かである。此の時代から少しく下つて聖武天皇の御代に彼の有名なる吉備眞備、遣唐使多治見眞人廣成に従ひて唐より齎らす所の五經、三史、陰陽、大衍曆などが次第に彼の陰陽師なる加義安憲、安倍晴明

など云へる人々に傳はり、漸く大成するに至つたが、更に盛大となつて一家の業となつたのは徳川氏の中葉である。明和安永の頃、神谷古曆が、斷易の法に依つて家相の善惡を論じ、地宅の見張、疊數の吉凶などを辨じた。是は今より見れば牽強附會の説に過ぎないけれ、太平優逸の世、迷信の深い時代の事であるから、事頗る當時の人心に適し、靡然として其の説を敷衍し、其の説を信奉するに至り或は之を干支、五行、九星の説を配し、或は九宮二十四方位の分界を定めなどして、今日の卜筮者、觀相家等の糊口を扶くるものとなつたのである。

四神相應の地

東に流水あるを青龍と曰ひ、西に大道あるを白虎と曰ひ、南に汗地(低地)あるを朱雀と曰ひ、北に丘陵あるを玄武と曰ふ。此の四者の具備せるを四神相應の地と稱し、蓋し最貴の象である。元明天皇平城遷都の詔勅に、四禽叶圖とあるは即ち之を指したもので、桓武天皇の平安遷都も亦是れに據つたのである。即ち支

那の古代に於て龍虎龜神爵(通鑑集覽に神爵は大さ鶉雀の如し、色に白彩あり云々)を四靈若しくは四禽の長とし、之れを四方及び四色に配し、龍を東方として青色に配し、虎を西方として白色に配し、神爵を南方として朱色(赤)に配し、龜を北方として玄色(黒)に配し、四方擁護の神と仰いだのに起因したものである。けれども之を最貴の象、帝王の卦にして庶人之を撰めば却つて其身を破ぶると云つて居る。即ち此の地形は帝京の如き大規模のものには極めて好適なるも、個人の邸宅の如きは北に丘陵を負うて此の一面に直射の光線など、通風が起つたならば常に陰濕の氣が盛んであるのであるから、寧ろ斯かる地形は好ましからぬのである。

營造宅經に「凡そ宅地の平坦ならむと欲するは名づけて梁土を曰ふ、後に高く前下きは名づけて晉土と曰ふ、之に居る吉なり。西高く東下きは名づけて魯土と曰ふ、之に居る富貴なり當に賢人を出すべし。前高く後下きは名づけて楚土と曰ふ、之に居る凶なり。四面高く中央下きは名づけて衛土と曰ふ、之に居る先

に富みて後は貧す」とある。前は南で後は北を指したものである。晉土、魯土の如きは東南の方面が低いから、充分直射の光線を受くるに適し、楚土は之に反して地勢上止むなく家屋を西向き又は北向きに建てねばならぬから、光線も通風も不充分で、衛生上適當なものではないのである。

東西北の三面が高く、中央が平坦で南の廣濶なるを吉とする。前高く、後低く、東南高く、西北低し、北に流水あるを三愚の地と曰ひ、之に居るを大凶とする。如斯地相は勿論避くべきで、然らざれば陰濕の瘴氣が害毒を逞うして、病患諸難の交々起らむこと今更吾人の喋々を要せざる所であらう。

之を要するに、地勢は平坦にして北西に稍高く、東南に稍低きを可とする。易に曰く、東南は陽なり、火なり、燥なり、乾なり、西北は陰なり、水なり、濕なり、濶なりと、陰濕の氣の人の體に佳ならざること云ふまでもない。住宅に於ける居室の如きは斷じて此の方面に取るべきものではない。されば東南の方が稍低くして直射の光線を充分に受け得る地を相すべきである。

直射の光線は衛生上極めて大切なもので、家屋の建築に於ては最も多く此の光線を收め得るやうに注意しなければならぬ。公衆的の建築物に於て殊に然りである。

家相の説

家宅に關する吉凶の説も、大體に於ては敷地の吉凶説と同じく、その張缺と方角とに依つて生ずる關係に於て云はれるのである。西北(乾)と東南(巽)及び東南北の四方の張出しは吉相、東北(艮)と西南(坤)及び西方の張出しは凶、同じく缺込も亦凶相とする。爰に最も注意すべきは建物の中心點で、東とか艮とか云つても、其の基點が確定しなければ、其の定め方が無い。同じ形の建物でも、その中心點の取り方如何に依つては、方位の觀念に種々の相異を生じて來るので、先づ以て建物の中心を定むることが、宅相隨一の要件であると昔の家相家も云つて居る。

家宅の中央

家宅の中央を定むるに大略三様の觀方がある。即ち總建物の中央を以て中眞を定むること、主人の居所を以て中眞とすること、主人の居間の在る棟の中央を以て中眞とすることの三種で各々其の主張はあるが、要するに第一と第二の中を採つた第三を以て標準として差支ないやうである。

同じ一棟の建物でも、其の缺張の具合に依つて中眞の定め方が異つて來る。例へば矩形に少しく張り出した形の建物の場合、その部分を省き、單に矩形の部分のみに就いて中眞を定め、又矩形が缺け込んで居る場合は、それを延長して矩形となし、それに就いて中眞を定めるのである。これは稍簡單な形の場合であるが、難然とした建坪の家宅の場合には、其の中眞を定めることが一寸困難になつて來る。

居宅の中央領 中央といふのは中眞を圍んだ或る廣さを意味するのである

が、その廣さは幾何であるかといふに、若し建物が九間角ならば其の三分の一即ち三間角丈の廣さを中央領とし、若し梁間四間半に桁行八間といふ様な建物ならば、其の短い方、梁間四間半と三分の一即ち一間半角を以て中央領とするのが一般の定めである。

居宅の中央と吉凶 居宅の中央の定め方は間取りに依り、其の説區々で、採り方が人に依り種々に異つて来る。従つてそれから割出された吉凶の結果に著しい相異を生ずる理である。是に依つて觀るも、所謂家相の吉凶判断なるものが、基礎甚だ薄弱で、中眞の定め方に依つては如何様にも變つて来る。

今日の建築術の間取法から云つても、一軒の住居が幾棟かに分れて互に統一なく、何處を中央に定むべきかも明瞭ならざる如き建物は其の物がすでに凶で、改めて吉凶可否を論ずるまでもない。居宅の中央を定め、人宮を配し、玄關、座敷、居間、臺所、便所、湯殿等各室の配置部位を論ずることは別段不思議でも不合理でもなく、現代の建築家が間取の研究をやるのと大なる相異は無い、たゞ異なる所

は、現代の建築家は之を日常生活の實用から割り出して、採光、通風、其他衛生上の點并に構造に重きを置いて室を按配するに反し、家相家は徒らに吉凶の聲を高くし、古い陰陽五行説の型に囚はれ、祕事若くは口傳等の如き傳説の蔭にかくれ、神祕の説を弄するの差があるので、其の可否は元より論ずる迄もない。

二箇の中央 昔の家相家は時として二ヶ所に中央を立てる場合がある。即ち本宅留守宅といふやうに一の構の中で建物が二部分に分れて居るが如き場合である。

中央と云ひ人方といふも、元より相對のことで、絶對のものではない。建築物が存すれば中央と定むべき基點を生じ、中眞が定まれば随つて人方位し、人方位すれば吉凶可否の論ずべきものあることは昔も今も敢て異なる所ではない。要は其の論據の如何に存するのである。又寺、神社等の類にも矢張り二様の中央を立てるので、其の一は方丈とか社務所とか、人の住居する部分、他は全敷地の中央を以て吉凶を定むるの基點として居る。人の住居しない部分即ち本堂と

か社殿に中眞を置かないのは、住む人あつて始めて論ずべき吉凶生ずといふ理由からである。

建築物の中央の定め方は大略前述の通りで、中央が定めればそれから人方二十四位を定め、然る後各部の吉凶判断に入るのである。

門と玄關との方位

家相家の説 門に就て家相家は、門は居宅に於ける最主のところ、例へば港口か切所の如き所で、是に依つて日夜出入し、世用一切を辨ずるのであるから、盛衰の關する事甚だ重大に、最吉所を選ばねばならぬと云つて居る。其の最吉とせらるゝ方位は乾(西北)と巽(東南)で、其の徳は主に富貴と幸福を主り、餘榮は子孫迄及ぶといふのである。次に東と南も亦吉、西と北は凶ではあるが、少し觸れて西では庚辛、北では壬癸に當る部位ならば差支へはないと言つて居る。吉方と構造 門の吉方も各人各説で、其の取捨撰擇に迷ふ。乾(西北)は全然凶で、

破財の相なりとする説もある。又南方(離)も吉ではあるが、極陽の方であるから、火難の相がある、即ち多少東方(震)へふらせて建つべきであるといふ説もある。たゞ艮即ち東北と坤即ち西南の二位を以て最凶とする點は凡て一致して居る。構造に就ては、門柱は直なるを吉とし、繼木等の有るもの及び門口が二ヶ所にあること、表口の眞正面に裏口の有る等は何れも凶となつて居る。又、門の明きの寸法にも、劍尺、玉尺、天尺等と稱する種々の尺度有つて、其の尺度吉寸に依らなければ、如何に結構善美を盡すとも等しく凶なりと言つて居る。

玄關の方位 玄關は門と同じく住居の序門、大切の箇處として取扱はれて居る。表門の正當に玄關の存するは不吉が、少しく右若しくは左へ傍止て備ふるを吉として居る。又商家に於ては、店先が玄關に當るのであるから、其の位置に就て最も宜しきを得なければ繁盛しない、即ち艮(東北)と坤(西南)の何れに面する時と雖も、之れ衰微を招くの基で、最凶相であると言はれて居る。乾(西北)及び巽(東南)は大吉、東及び南向も吉、西方と北方は其の次に位する吉方として、門の方位に關

する説と同様なことが云はれて居る。

門と周囲の關係 住宅建築に於て門及び玄關の位置、構造等は重大なる問題で、客來の多い家では其の位置如何といふことが多大の影響を及ぼすのみならず、家人が日々出入するにも其の氣分に至大の相異を生ずる。家相家が是を以て居所第一の要所として其の吉凶を論ずるのは元より至當である。然れども此の問題は單なる方位のみにて決定する譯には行かぬ。必ず宅地と周囲の關係、殊に街路の位置如何に依つて定められなければならぬ。何れの宅地に於ても、其の周圍が凡て道路である場合は尠い、必ず其の一方か或は角地面の如き二方が道路に接するので、宅地と道路の關係は、自ら門と玄關の位置を限定して、方位が如何であらうとも、外には設くることの出來ぬ場合が多い。門と玄關の位置は建物總體の間取にも密接の影響を及ぼすものであるから、宅地撰定の第一歩に於て、特に此の點に注意する必要がある。

門と玄關の採光 道路が東西に通ずる兩側の敷地では、北側の家は自ら南向に

門を開き、南側の家は自ら北に面して戸を開かざるべからざる理である。併し等しく南に向ひ北に面するも、其の位置の多少の相異、且つは本家玄關との連絡如何に依つては非常に便利にも亦不都合にもなるので、此の點が特に考案を要するのである。一般に東とか東南とか或は南の如き、午前中殊に日當りの良い部位に門若くは玄關が有るといふ事は、其處を出入する者をして何となく、生々した陽氣な感じを起さしむるものであるが、反對に北或は東北の如き、一日中日光の差込まぬ部位に、門が開き玄關が面するのは、實に陰氣で、薄暗い感じを與へる。住宅は如何なる場合に於ても、充分日光に浴することが必要で、一見極めて愉快を感ずる家は、全面に日を浴びて其の凸凹が適度の陰影を壁に彩る如き日當りの良好な家である。此の意味に於て、可及的陽氣に面する門及び玄關を要し、陰氣を受くる位置を忌むのは一理有る事である。然れども門及び玄關が多少陰氣でも、居間に於て極めて陽氣であれば、陰陽相對照して却つて愉快な變化に富んだ住宅を得られると思ふ。

門、玄關と居住者の關係 俗に所謂「醫者の玄關」と稱して、門や玄關のみを堂々とするのは餘り感心しない。勿論門と玄關とは一面に於ては、住む人の威嚴に大なる關係があるけれども、分に過ぎたるは不可で、住む人相應の權威を此處に表現するだけの用意があればよいと思ふ。彼の徒らに數寄をこらして、變つた型だの意匠を用ゆるのは、其處の主人の心裡も推量されて不可である。訪問者をして何となく親しみのある。床しき上品なる意匠なりと感ぜしむることが必要である。商店等に於ては、殊に此の點に注意しないと、思はぬ失敗を免くことがある。又、門を這入つて真正面に玄關のあるのは、官舎とか身分のある人の住居の外は餘り尊嚴に過ぎ、普通の住居には應はしくない。必ず車廻しを附するとか、或は少し左右に傍よつて多少の變化ある方がよい。

塀の高低 塀が著しく高いのは陰に過ぎて凶また餘りに低過ぎるのも陽に走つて凶、中庸を得たるを以て理想とする。我が國の住居は、一般に墻壁を高くし、互に割居の氣風が現今でも著しく認められるのであるが、是は一面盜難火防等

から來る、必要な要求は別として、現今の進歩した建築術から觀て餘り面白いことではないと思ふ。

疊間取と段階子

疊數と五行 家相家の説に依れば、疊は地の萬物を載するに等しく居常安臥の處であるから、吉凶殊に著しきものとなつて居る。其の定法とするところは、主として五行即ち木火土金水の相生相尅によるので、其の相生の數に間取を處くを吉とし、相尅を以て凶とするのである。數の當て方は、一疊は乾の金、二疊は兌の金、三疊は離の火、四疊は震の木、五疊は巽の木、六疊は坎の水、七疊は艮の土、八疊は坤の土、九疊以上は凡て八或は其の倍數を引いた残り、右の五行の數を決める。例へば十疊ならば八引いて二残るの兌の金と云ふ如くである。

疊數と九星 吉凶の定め方は、店とか玄關とか表向の所では、其の方位と相生の數を以て吉とする。即ち北向ならば、北は水であるから、四五九或は十の如き木

金の數を以て吉とし、南向ならば、南は火であるから四五七或は八の如き木土の數を以て吉なりとして居る。又主人の居間の疊數は、其主人の九星本命の數と互に相生の數を敷くを理想とするので、即ち主人が一白ならば、一白は水星であるから、四五九或は十の如き金木の疊數を以て吉かし、二黒ならば、二黒は土星であるから、三九一或は十一の如き火金の疊數を以て吉とする等である。又間取の續け方は、次々か互に相生の數となるのを貴ぶので、例へば四疊或は五疊は木であるから、次は三疊の火を以て吉とし、三疊の次には七疊或は八疊の土を置き、次は一疊或は二疊の金、次は六疊の水と云つた具合に順々に相生の數に配置するのを吉として居る。又中央に四疊半があるのは子孫虛弱で凶とし、中央のみに限らず何れにせよ四疊半の多きは衰微を招く象、四目疊及端疊の多いのも凶として忌むのである。凡て貨財を求めんと望む人は、中央の間に一二九十等の如き金に屬する疊數を敷けば、土吉金の道理で、富貴になること疑いなしと言つて居る。

相生相尅と吉凶 相尅と云つても、必ずしも凶とす可きでなく、家相家の中でも、相生のみを吉とし相尅の凡てを凶とするは愚蒙の第一である。と反對説を唱へて居るものもある。其の説に依れば、天地は五行の相生尅が併せ行はるゝ事に俟つて成就するので、相生のみが吉で、相尅か凡て凶なりとする理由はない。水生木と水より育つ木であるけれども、木尅土と木を尅する土有つて木も育ち、土尅水と土より尅する水無くては、是亦木も育たず、金尅木と木を尅する金が無ければ木を育つる水は生じない如く、只相生のみを吉として相尅を忌むのは、眞の相法を知らざる皮想の見であると言ふて居る。如斯にも拘らず、現代に於てすら此の愚蒙説に迷つて、新しき道あるを知らぬ人あるは遺憾である。

以上述べた疊間取に關する古來の説は、人に依つて區々且つ信を措くに足る可き程のものではない。殊に疊といふものを全然使用せぬ洋風建築では全然當て嵌まらないものとなる。然し間取などは何うでもよいといふのではない。是は住宅建築に於ける最大切の問題で、其の大小廣狹、實用と相俟つて遺憾なく、

全體としては統一あり調和あり、一見して其の配置が何となく快活な感じを與ふるものでなければならぬ。狭い室のみが幾つも並んだり、眞四角な室が多かつたり、幅の割合に奥行が深過ぎたりするのは、家相家の説を俟つ迄もなく、凡て凶と稱し得るので、要は大小參差、よく生活上より生ずる實用と相並んで配列の妙を極むるにある。

段階子と板の間 家相家の説に依れば、段階子と板の間は、家の中央に位する事を以て宅主に病難有りとして忌むのである。其理由は段階子は踏み下る所であるから、是を居宅の要地たる中央に設くるのは、踏窪むるの理で凶とするところ、別で深い理由がある譯ではない。凡て段階は階上階下を連結する大切な場所、其位置并に構造は最も注意を要するのである。殊に二階に客室を設くる場合には、玄關も勝手元兩方からの連絡が特に大切なものとなる。又間取の都合上如何にしても、階段が家の中央に来ることもないとは限らない。然しそれが凡てに於て最も便利な位置であるならば、中央の階段必ずしも凶とは云

はれない。

竈と井戸の方法

竈は禍福の主 住宅の内で門や玄關に次で大切な場所とされて居るのは竈で、竈は禍福の主、人家に在つては日用第一の要所と説いて居る。次に其の方位に關しては、艮(東北)坤(西南)及び中央が最凶、乾(西北)巽(東南)及び四方の正當を除いて構ゆるを吉相だとして居る。又其の火口の向方に就ては、兌(西方)と乾(東南)に向ふのは散財、坤艮及び坎(北方)に向ふのは病氣、炎害、離(南方)に向ふのは爭論と云つたやうに凡て凶、たゞ震(東方)と巽(東南)に向ふを以て吉なりとして居る。何れにしても、竈の火口や焚火が往來から見ゆる様な場所に在るのは甚だ悪いとして居るが、是は尤もなことである。又火口の數は、三、五、七等と續くのは吉であるが、一、二、六、九は皆凶、即ち一、二は破財と盜難、病難、三は散財、六は不和、五、七が家内和睦し、子孫繁盛とし、此の内三つあるものは吉凶内説があつて決しない。

井戸の位置 井戸の位置としては、竈の近邊にあるのは凶、東西南北共に正當に在るのも凶、殊に西南に井戸があれば、家内に難病があると云はれて居る。又艮（東西坤）西南に在るのは最凶で、産業の衰微、養子が相續する相だと云うて居る。而して最吉なる位置は乾と巽であるが、一説には乾の井戸は濕氣の病が有るとも、云ふ。此の中で巽が其の位置最も良く、福祿多く、子孫繁盛の吉象とされて居る。又宅地内に古井戸の有るのは忌む可きもので、不具の病を患ふるの難があるといふ。之れを取除くには、井戸側、水澄し等を悉く取除き、清淨なる土砂を以て埋むるを法として居る。

竈と臺所及衛生問題 竈と井戸の問題は、結極臺所の位置、設備如何の研究に外ならぬものと思ふ。云ふ迄もなく、臺所は日常生活の根本、住居の内でも殊に大切に屬する部分で、夏涼しく冬暖に、日當り風通し共に良好であらねばならぬ事は勿論、竈とか井戸とかの位置、食物調理の諸設備、薪炭器具、食料の貯藏場、流しと其の給水、排水の取設等出來得る限り清潔にし且つ便利な配置構造が無ければ

ならぬ。客座敷の位置等にもみ意を用ゐて臺所の位置を等閑に附するのは、當を得た事ではない。又井戸水を飲料水に使用するといふことは、第一衛生上から見ても好ましいことではない。大都會に於ては水道の設備があるから、殆んど問題にならぬが、地方に於ては重要な問題である。使用水の排出に就て家相家の説を見ると、凡て不淨物を洗つた汚水は、速かに流し出すを以て吉とし、其居住地内に停滯する事を最凶として居る。又其の流出する方向に就ては、東北と西南及び北と南は悉く凶、東南と西北及び甲乙庚辛の方位を以て吉として居る汚水の停滯は衛生上如何に有害であるかは云ふまでもないことである。

廁と浴室の方法

廁の方位と吉凶 廁と浴室は何れも不淨の場所として、其の位置が甚だ難く、殊に廁は臭穢の留る所であるから、最も貴所と陰地を忌むと稱する。即ち坤と艮の二方に在るときは家業を妨げ、病難を醸し、子孫を殃ひするものとし、東西南北

の正當に在るも凶、乾と巽は、亥と己の方に寄せて設くれば差支へなく、其の他は八千の位、即ち東西南北の正當を除いた所に在るならば凡て妨げなしとする。凡て廁が他の建物と棟續きに在るのは大凶で、必ず是を別棟に設けなければならぬとか、或はまた位置備へ所に缺點はなくとも、北向北窓は凶であるが、若し其の直前に建物があるならば差支へなしとか種々の説が唱へられて居る。

浴室の方位 浴室に就ては、伸及び艮の陰位に是を構ゆるは別して凶、必ず種々の災害有つて家運が頽廢する。乾、巽及び東西南北の正當を除いて設備すれば先づ差支へなしと云うて居る。廁と浴室は云ふ迄もなく何れも不潔の場所、和風の建築では其の配置に於て常に最も困難を感ずるのである。凡て東西南北の正當及び東北、西南を除いた傍位に設けよといふ家相家の説は全然道理の無いことではない、殊に北向北窓の便所の如き冬分には非常に寒くて使用上の不便がある。又之を別棟に設けよといふのも、臭氣と不潔の點から、潔癖な日本人の要求としては當然の事である。

浴室と廁の衛生的方位 廁と浴室の問題は建築の構造が完全で、排水の設備が充分であるならば、何處に設けても良いわけで、洋風住宅の如きは、寢室に隣して常に廁と浴室が設けられて居るのは、壁と床の構造及び不淨の排去方法が完全であるから毫も差支へない道理である。和風の住宅に於ては是と其の趣を異にし、大きな家になれば、それだけ幾つかの湯殿や便所が入用で、其等を適宜に便利な位置に置く事はなかく、困難な問題である。浴室は勿論便所の如きも身體を露出して用を足す所であるから、相當に日當りのよい暖い部分に在ることが望ましい。我が國に於て浴室は兎も角便所の方は、汚物排去の方法が頗る進歩せず、殊に都會の一般住宅に於ては、周圍の事情もあらうが、食事する所の直ぐ傍に便所があつたりなどする。是等に就て適當な改良を講ずることは最も必要な問題であらうと思ふ。

倉庫と納屋の方位

倉庫の位置と吉凶 倉庫の位置は、乾と巽を大吉とし、南方は是に次いだ吉だとして居る。又西方に構ゆるもよく、北方は壬の位、東方は乙の位に傍せて設くれば妨なしと云ふ。たゞ艮と坤の二位に在るは大凶で、宅主短命にして子孫絶ゆと云はれて居る。是れ倉庫は土を主要材料として造り、其の性陰に屬するものであるから、坤艮の陰位に置く時は、重陰の理に依つて凶である云ふ。又土藏は其の廣狹に拘らず、三階建は凶常に棟筋を南北に取り東西に流れを附し、戸前に及び窓の堅横共、凡て天尺の吉寸を撰ぶを定法とする。また他の説では、乾の外北方に在るを以て産業日々に榮え、破財を免るゝ吉方とし、東、巽、南及び西は皆凶とし、比較的新しい説では、乾は冬秋の間、萬物の納る所であるから家財を藏するに適し、巽は春夏の間活動の位であるから商品等の貯藏に適する等とも云はれる。次に納屋物置は多く不淨の物を收むる所であるから、坤艮の陰地は大凶、凡て傍位たる甲乙丙丁庚辛壬癸及び亥と己の位に構ゆるを理想として居る。倉庫及納屋理想の方位 倉庫は器具家財を收むる大切の場所で、主として火災

盗難の豫防設備であるから、此の意味に於ては敷地内の最も奥深い所が適する。凡て物品の貯藏には濕氣を忌むので、附近に濕氣と呼ぶやうな所は勿論悪く、東北即ち艮を以て凶とするのも艮の如き最陰濕の部位に觀るから陰氣な土藏を置く事は決して好ましいものではない。また巽は日當りもよく陽氣で、土藏の位置としては理想に近いのであるが、東方に入口を設くる場合の如きは餘り感心されない。また納屋の如きは、たゞさへ餘り清潔な所でないのが、其の位置に依つては一層不潔に見苦しくなる。要は本家の位置に應じて適宜是れが配置をなし、周圍に相當の空地を存することが必要である。

「離座敷と茶室の方位

離座敷の吉凶方位 これに關してはさしたる吉凶の論は無く、たゞ艮及び坤の二方へ張出すのは凶とし、又凡て一方口の離座敷を忌むので、必ず家督に離るゝ難があると云はれて居る。如斯場合には、他の一方にも連子窓を設くるを以て

吉相とするのであるが、これは通風の點から必要なことである。茶室の方位 元來茶室を設けることは、奢侈の一端であるとして、一般に家相家の方では好まない。たゞ清貧獨樂の住居とか、又は別莊の様なものならばよいといふのである。若し強いて之を設くるならば、元來が必要といふ性質のものでなく、専ら閑雅遊樂の場所であるから、別に位置方を撰ばない理である。ただ茶室其の物が、周圍に樹木を植ゑ、厠を設け、燈籠手水鉢等を置いて頗る陰氣に出來て居るから、艮、坤の陰位は絶対に忌むので、東西南北の四方及び乾、巽等何れにしても、厠とか手水鉢の類が正當にならぬやうな位置ならば凡て差支へなしとするのである。

割合に家族の多い家等で、殊に老人などが居る場合、少しでも落付いた閑靜な室を望む時は、勢ひ離座敷を設けなければならぬ。其の目的からして餘り陽氣なものでないから、位置としては出來る丈け陰濕の地は避け、また勝手元からも遠ざかる必要がある。又主要な座敷よりや却つて離座敷の方が廣いのも實用

上決して當を得たものではない。また茶室の要は簡素を尊ぶに在るので、狭い庭前に徒らに木石を配し、座敷鼻突き合す様な狭いところに無理に設けるなどは決して當を得たものではなく、全體が非常に陰氣なものとなつて了ふ。

泉水と築山の方位

泉水の吉凶方位 泉水は動かぬ水即ち死水であるから、家相家の方では餘り設くる事を悦ばぬ。殊に陰濕のものであるから、艮、坤の陰位に置くは大凶、宅主妻妾病勞絶えずして夭死の患ありとする。次に南方も凶で、同じく病難がある。巳と亥の方及び甲乙庚辛壬癸の位ならば先づ妨は無しと云うて居る。

築山の吉凶方位 これも泉水と同じく好んで造るべきではないといふ説で、元來が純陰に屬するものであるから、艮、坤共に重陰で凶、北方は陰地ではあるが、玄武丘陵の理で差支なしといふ。又一説には乾より艮にかけては凡て吉とも云うて居る。其の他庭園に關しては、手水鉢、水瓶等も同じく陰濕のものとして何

れも陰地を忌み、大なる樹木に關しては乾艮及び北方を以て吉とし巽及南を以て大凶とする説などがある。一體泉水だの築山などいふものは、家相家の説の如く務めて設くべきものではない。殊に庭園の狭い場合は衛生上から云つても、成るべく避けた方がよいのである。

結 論

古來唱へられ來つた家相説の一般は以上をもつて大略を盡したつもりである。思ふに正しき道を進むに選ぶべき何の方位もなく、誠の心を以て行ふに忌むべき何の日もないのである。元より物には順序あり、時には時機あり、南に進むを利とする時に當つて獨り北に行くが如きは元より愚の極なりと雖も、其は各自の位置境遇に應じ、職業技能に依つて自ら定まるべき問題である。例へば商業上時機到來して東に移るを利ありと觀たならば、其の日が吉日、其の方角が吉方であらねばならぬ。之を要するに家相家の唱ふる所は一得一失であつて、

必ずしも其の悉くを信ずるには足りないが、人の忌み嫌ふところは努めて之を避けるのが建築家の一の任務であると思ふ。即ち之が爲めに註文主に對して不快の念を興へることは、聽て其の人を非衛生に導く所以で、建築家たるものも大に心すべき事柄である。

理想の中流住宅

住心地好き
中流住宅

大正九年九月二十一日印刷
大正九年九月二十一日發行

住心地好き
中流住宅
定價金貳圓



著者 近間 佐吉

發行者 東京市日本橋區本石町三丁目十六番地 株式會社 博文館

右代裝長者 大橋 進一

印刷者 東京市牛込區市ヶ谷加賀町二丁目十二番地 青柳 十一郎

印刷所 東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地 株式會社 秀英舎 第一工場

發行所

東京日本橋區本石町
振替東京二四〇番
株式會社
博文館

新意匠の住宅

大判全一册洋装美本
精密圖數十葉
正價金貳圓四拾錢
郵税金拾貳錢

住宅の設計必ずしも専門技術家の手を俟たない。寧ろ他人を煩はすよりも其の住むべき人自らが自らの生活に根ざして自ら工夫すべきである。住宅は生活の容器である。而して完全なる住宅は自らの生活に最も適應したものでなければならぬ。本書はかかる立場から先づ眞の住宅の意義を明かにし、改良したい事柄を一々附記にして其名に背かざることを期したのである。

平稻 林垣 共著
金英 吾夫 著

目次概要

- 住宅の意義と理想……現代の生活と住宅……住宅の由来……
- 敷寄屋風と住宅……設計より住ふ迄……敷地……
- 東京郊外の新住宅地……間取の研究……構造の概要……
- 建築費……家屋と住宅……附圖説明に就て……

東京日本橋區石町
株式會社 博文館

通俗家屋改良建築法

大判全一册洋装
精密圖數十葉
正價金壹圓
郵税金六錢

本書は著者が多年の経験により、普通住居向家屋の建築に關する方法を便利、衛生、經濟に鑑み、急激の改良を言はず、我が國現時の生活と習慣とに伴ひ、我が家屋の改善すべき要點を指摘し工事計畫の順序により構造の要點及び巻尾に附するに仕様書と工費の豫算を附記し極めて通俗平易に記述し、且精密なる圖を添へたれば將來建築をなさんとする人に多くの便利を與へ、且つ後進建築の參考として意を盡したる要書なり。

目次概要

- 總論……土地選擇の事……配置を定むる事……製圖の事……
- 問室配置の事……室内流通の事……光線の事……構造の事……
- 家屋高さの事……礎及各部の木割の事……軒廻り及屋根の事……建築形式の事……
- 色彩配合の事……床の間及棚附書院の事……欄間の事……壁の事……
- 疊の事……天井の事……建具の事……西洋室内部の事……
- 木材應用の事……門の事……橋垣の事……家屋改良の要旨……

東京日本橋區石町
株式會社 博文館發行

工學士 眞水英夫 校閱
井上繁三 著

山水めぐり

第六版 三五判 新形函入 正價壹圓六拾錢 八送錢料

大町桂月著
筆に健にして脚に健なる桂月先生好んで山水を探り、徹底的に勝を窮め、到る所隠れたるは顯はれ山水爲に光輝を發す、先生の如く山水に忠實なるは世に其の比を見ず、加ふるに先生を獨得の好文以て遊覽に資すべし以て臥遊に充つべし。

大類 伸著

著者が古城に舊蹟或は神社佛閣に傳説俚俗に古を偲び今を思ふて綴りなした史蹟であり感想であり又紀行文である勝地に遊び歴史に興味を有つた人に薦む。

史蹟めぐり

第十版 三五判 新形函入 正價壹圓六拾錢 八送錢料

佐佐木信綱著

吾國古今の名所に關する古人今人の和歌を汽車の沿線汽船の航路の順次に編纂して説明を加へ且臺灣朝鮮南洋歐米の名所の作をも網羅し、所謂居ながらにして名所を巡り得べき家庭の好讀物。

和歌名所めぐり

第二版 三五判 新形函入 正價壹圓六拾錢 八送錢料

旅から

最新刊 三五判 新形函入 正價壹圓六拾錢 八送錢料

田山花袋著

この集は主として著者の旅行中より得たるめづらしい短篇を集めたものである。或は山の温泉に或は山上の湖水に、或は平野に、或は海邊に著者がいかにその觀察の眼を注ぎ、いかにその感興を繁いだかを知らうとするには、この集を播くに越したものはない。

谷口梨花著

梨花氏が四季折々に大方の旅行者の遊覽に目的となるべきところを書き集められたのが本書です温泉・海水浴地・神社佛閣・名所舊蹟洵らす所なし特に家庭的旅行計畫の参考に供しよと努めたるところに此書の特徴は存して居ます。

名所とところぐ

第二版 三五判 新形函入 正價壹圓六拾錢 八送錢料

田山花袋著

遊跡天下に普き著者が、その敏感犀利の觀察眼に映した山川都鄙の風物光景を巧みに藝術的に描寫したのが本書である、平凡な風景、平凡な事實も一度著者の筆に放つて讀者の眼前に展開され、宛も繪巻物を繰くやうな感がある、臥遊にも藝旅にも供ふべきは此書である。

山水處々

第三版 三五判 新形函入 正價壹圓六拾錢 八送錢料

町石本區橋本日京東
 行發館文博社會式株

町石本區橋本日京東
 行發館文博社會式株

ITHD-69

六段 雁金 準一 共著
三段 小林 健太 郎

圍碁講義

入り難き成り難き圍碁本の技を師に就かずして、而かも猶ほ能く入り易く成り易からしめんが爲め、兩棋伯が多年の實驗に基く錦什を編みたるもの即ち本講義なり。初心者の絶好指針たるは論なし高段大家と雖も以て參考資料たるべし、洵に近來に於ける棋界出色の好著なりとす。

1 ▲圍碁手ほどき (上)	7 ▲置碁石立 (中)
2 ▲圍碁手ほどき (下)	8 ▲置碁石立 (下)
3 ▲圍碁手筋 <small>詰方 委寄 形分</small>	9 ▲互先定石 (上)
4 ▲置碁定石 <small>委形 侵分</small> (上)	10 ▲互先定石 (下)
5 ▲置碁定石 <small>附實 戰圖</small> (下)	11 ▲互先石立
6 ▲置碁石立 (上)	12 ▲打碁

全十二冊

和紙大判美本 正價每編 壹圓
每編百冊頁内外 郵稅每編 四錢

東京日本橋區本石町

株式會社 博文館發行

終